

巻頭言

逆風に抗って、 協同の力で地域をつくる

—東日本大震災・福島原発事故から 15年目を迎える福島から

千葉 悦子 (福島大学名誉教授)

今まで築き上げてきた飯舘村の暮らし、色々な自分たちの活動などが、この震災で本当に崩れ落ちた気がします。……私は悔しくて仕方ないです。でも、飯舘村民のやる気、ふんばる心、立ち向かう力を持っている限り、また再現できると思っています(「未来館ニュース」臨時版、2011年8月)。

以上は全村避難指示が示されてまもなく2011年5月20日、福島大学の総合講座「ジェンダーを考える」のゲストスピーカーとして登壇していただいた佐野ハツノさんが公民館事業「若妻の翼」でヨーロッパ研修の機会を得て自分を発見し、自主グループの地域活動や村の農業委員として「までい^{*1}な村づくり」に関わってきたこれまでと全村避難を余儀なくされた悔しさを語ってくれた授業の最後に述べた言葉です。ハツノさんは福島市内に開設された飯舘村の大規模避難所の管理人さんを任せられ、家族と別れて元気のない高齢者女性たちを元気づけようと「カーネーションの会」をたちあげ、全国から届けられた着物の古着をリフォー

ムする「までい着」づくりに奔走しました。評判がよく避難解除後は村に戻って継続したいと強く望んでいましたが、病に倒れその願いは絶たれました。どんなに無念だったことか。

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故から15年目を迎えました。帰還困難区域を除いて避難は解除されたとはいえ、未だに4万2000人が避難を続け、避難解除となった浜通りの自治体の多くは震災前の人口を大きく下回っています。6000人の飯舘村は現在4000人、帰還者は1500人です。時が経過するに伴って、原発事故の記憶のない世代が増え、風化が懸念されます。原発事故は何をもたらしたのでしょうか。

原発NOを選択した福島

原発事故は原発に依存するエネルギー政策を根本から見直し、原発からの脱却を私たちに迫るものでした。2011年8月、原子力に依存しない、安全・安心で持続的な地域づくりを基本理念とする「福島県復興ビジョン」がまとめられ、福島県

*1「までい」とは丁寧、優しいなどを含意する地域の方言。飯舘流はスローライフを「までいライフ」と呼び、村づくりの基本理念としてきた。

議会では県内10基の原発廃炉が決議されたことを記憶している人も少なくないでしょう。翌年5月には国内の全原発が運転を停止、23基の廃炉を政府は決定し、また東電は存続を模索していた福島第二原発の廃炉を2019年7月に表明するにいたります。県民の「原発全基廃炉」の声に、東電も廃炉を表明せざるをえなかったのです。

原発回帰に舵をきる日本政府

ところが2014年4月安倍政権は「第四次エネルギー基本計画」を発表し原発を「重要なベースロード」と位置づけ原発再稼働を進める方針を示しました。さらに岸田政権は脱炭素を名目に原発60年超の運転を可能にする「GX脱炭素電源法」(2023年)を法制化するとともに、2025年には「原発依存度の低減」を削除する第7次基本計画を石破政権は閣議決定し、原発回帰への国の方針転換を明確にしました。

しかし、福島原発の廃炉作業は遅々として進んでいません。これまでに取り出した燃料デブリはわずか0.9g、デブリの推定総量は880トン、廃炉完了の目標年は2051年です。燃料デブリの取り出しが遅れれば、汚染水・処理水は増え続けることとなります。地下水の流入量を抑える抜本的方策がなされる必要がありますが、全く手が付けられていません。核燃料の取り出し、その保管場所、建屋解体など他にも課題は山積みですが、その

解決は将来世代に預け、原発依存に回帰するのは無責任というしかありません。

口をつぐむ住民、故郷と避難先で揺れ動く

当初、怒り、嘆きを露わにしていた被災者もいまは口をつぐんでいます。賠償金の有無や多寡、放射能の健康リスク、あるいは帰還をめぐる家族や住民間の意見の深い対立など、価値観を共有できないことが多々ありました。避難先での生活が長期化する中で現状回復を望んでも何も変わらない現実に失望し、諦めを抱いている人々も少なくありません。政府が掲げる「福島の復興」の方針と異なる意見は「復興の邪魔になる」「風評加害」と攻撃され、自由な意見表明が封じられる事態が増えていることもまた事実です。口をつぐむ理由はひとつではありません。さまざまな苦悩を抱え、沈黙することで今を生き抜こうとしているのです。

避難解除の時期が遅れるに伴って、帰還する住民が減っていることを先述しました。避難先に根をおろし、帰還にためらうものが少なくないからです。しかし、震災直後から双葉8町村の住民を対象に調査を継続している丹波史紀^{*2}は被災者の揺れ動く姿を浮かび上がらせています。避難先に住まいを購入・再建しているものが過半数を占めますが、いずれは帰りたいが避難先での生活を安定したいがために住宅を購入したというケースも多く見出せます。故郷への愛着、地元への帰属意識をもち続けている人々が相当

*2 丹波史紀『原子力災害からの複線型復興 被災者の生活再建への道』明石書店、2023年。

数存在していることも明らかにしています。加えて、2021年の3回目の調査では2回目に続いて現役世代でも2割が無職であること、また故郷を奪われ、家族や仕事をなくし、地域や職場の人間関係が失われ、深い悲しみや喪失感により心身の健康を害しているものが少なくないことが見えてきました。

ここで生きる、つながる、つくる

それでも、深い喪失感を抱きながらも、そこからたちあがる人々がいます。2013年から対話の場づくりを行ってきている「いわき未来会議」や「復興と廃炉の両立とALPS処理水問題を考える円卓会議」(2023年～)、市民目線で原発や復興について考えようと震災直後から始めた「福島復興支援フォーラム」(2011年から250回をこえる)などは、対話を重ね、学びあいながら共同の力で分断・対立を乗り越えていく試みといえます。震災の記憶・教訓を未来につなぐ語り部活動や地域の伝統芸能の復活・再生の取り組みは岩手、宮城、福島3県に広く見出せます。安全な食・農を取り戻そうと農の再生に尽力する生産者の協同実践なども、注目すべき取り組みです。

ここでとりわけ注目したいのはエネルギーギッシュな女性たちの食・農の再生や地域をつくる実践です^{*3}。阿武隈高地の避難女性が広域的につながりながら、培ってきた食の技術を活かし、故郷の味をつ

ないでいこうと立ち上げた「かーちゃんのか・プロジェクト」。二本松市岩代地区にある「道の駅さくらの郷」を拠点に地域に根ざした食をつくることに注力した山崎友子さんとその仲間たち。葛尾村の5人の女性たちは生活改善グループの活動を発展させ、伝統食しみ餅を商品化した「おふくろフーズ」は、避難解除後、継続を望む母の想いを受け止めて代表の娘さん2人が続ける。「[じいちゃん]、[ばあちゃん]を励まそう」とエゴマ栽培とその加工、地域の伝統食「かぼちゃ饅頭」の復活に奮闘する石井農園(石井絹江さん)。二本松市東和地区では震災後に里山の暮らしを捉え返す「あぶくま農と暮らし塾」や「とうわ地元学」を実践し、昭和一桁の女性の聞き取りや地元の食の掘り起こし、郷土料理講座、冊子づくりなどに取り組みました。2つの実践を紹介します。

村オリジナル品種「いいたて雪っ娘」を守り、広げる

渡邊とみ子さんは、震災前、市町村合併を考える村民企画会議の村民代表や第五次総合振興計画の部会別委員となったのを契機に、飯舘村のオリジナル品種で産地形成を目指そうと加工販売に力をいれてきた女性です。原発事故で避難を余儀なくされましたが、飯舘村特産のカボチャ「いいたて雪っ娘」を絶やしてはならないと、避難先の福島で作り続けまし

*3 女性農業者の取り組みは以下にも詳しい。荒井聡編著『食農コミュニティの新展開 福島で考える農山村振興』筑波書房、2025年。佐藤一子・千葉悦子・宮城道子編著『<食といのち>をひらく女性たち』農文協、2018年。

た。とみ子さんは、飯舘村、葛尾村、浪江町など阿武隈高地の女性たちに呼びかけて、広域的につながりながら、培ってきた食の技術を活かし、故郷の味をつないでいこうと「かーちゃんのか・プロジェクト」を立ち上げ、漬物、お菓子などの加工・販売、健康に配慮した弁当づくりなどで経済的自立を目指しました。避難解除後は「いいたて雪っ娘」の本格的な生産・加工販売を仲間と手掛けるかたわら、語り部活動・体験ツアー、阿武隈食の遺産継承の活動にも精力的に取り組んでいます。それを応援するのは「かーちゃんのか・プロジェクト」でつながった全国の方がたです。飯舘の自然や農の恵みを五感で感じてもらうと、交流の場も兼ねた農家民泊を2025年から始めています。

浪江を発信する

浪江町津島地区出身の石井絹江さんもまた故郷を食を通じて発信しようと奮闘しています。そのルーツは震災前にありました。「長靴はいて外に出て仕事をしたい」と志願して町役場の産業振興課に移ったのは1999年。それまで町役場の女性職員は事務仕事オンリー、庁外で仕事をする部署に配属されることはなかったといいます。「遊休農地が目立ち始めた頃で、東電にいけば1日1万円にもなる。それを山の産物でできないか」と考え、標高400~500mの冷涼な津島に適したりんどう栽培やブルーベリー栽培を構想します。中でも力を入れたのは遊休農地を解消する「一人一畝歩運動」と称したエ

ゴマ栽培です。「お母さんたち」に呼び掛け「津島活性化グループ」の立ち上げに尽力しました。わさびやみょうがも人気商品でした。退職後は自分もグループに加わってナツハゼを本格的に始めようと考えていた、その矢先の震災です。4世代同居だった家族はバラバラ。絹江さんは二本松市の仮設住宅に避難し仮設診療所で勤めを継続し、1年後に退職します。呼びかけに答えるようにして「かーちゃんのか・プロジェクト」に参加し、その後、福島市内に農地と加工場を確保して、農園の栽培と加工活動を開始しました。「避難指示解除後に戻るのが高齢者だけならば、高齢者が元気にかわるものを」との思いで、とくにエゴマ栽培に力をいれました。後に、あとを継いでくれる移住青年にバトンを渡し、現在はイチジク、ウメ、サクランボ、モモ、カキ、リンゴを「素材を食べるジャム」と称して加工販売に力を入れています。また、かぼちゃ饅頭の商品化にも力を入れています。浪江の農家では「こじはん」(おやつ)として作っていたかぼちゃ饅頭を義母から教わり販売を始めます。ただただおばあちゃんたちがつないできた伝統食を次世代につなぎたい、浪江を発信したいという思いからです。現在は葬式の重箱膳などに注文が相次いでいます。

自分らしく生きたい、地域とともに生きたい

ここで紹介したのは一握りの事例です。食・農を取り戻そうとする取り組み



福島県三春滝桜 出典：2023年4月千葉悦子撮影

は面的な広がりは見えないとしても、各地で見出せます。彼女・かれらに共通するのは、「仲間とともにここで生きるに値する地域をつくる」という強い意思であり、「ふるさとを諦めない」「ここで生きる覚悟と誇り」です。そこでは地域の課題に向き合いながら、「歴史・風土に根ざした多様な暮らし」の価値を学び直す多様な実践が紡ぎ出されているといえます。その中核を担うのがここでは触れることができませんでしたが若者や女性たちです。地域を学び直し、地域の豊かさを捉えなおし、地域を作り直す自覚的の主体として立ち上がってきています。震災前の地縁的コミュニティではなく、IターンやUターンなど外部から人を迎え

つつ、従来の枠を超え、課題でつながり、連帯するコミュニティを創り直す実践がひろがっています*4。

住民不在の巨大資本の参入による復興ではなく、小さくても住民自身が主人公となるコミュニティの再生、地域経済の再生・創生の重要性が示されているといえます。これは人間らしい働き方を提起する労働者協同組合運動の理念と重なります。福島で労働者協同組合の運動が大きく広がっているとは言い難いですが、持続可能な地域を福島の地に創りだす営みの広がりはその可能性を示唆するものではないでしょうか。ハツノさんみていてください。

*4 震災に立ち向かう東北・福島の人々の実践を全国の社会教育関係者と共有しようと、2024年8月に社会教育研究全国集会を福島の地で実施した。『日本の社会教育 2024』（集会資料集、報告書）に詳しい。